

「第2回くまもと未来会議リレー講演」講演録

- ◆ 日 時：平成25年11月21日（木）14：30～17：00
- ◆ 場 所：阿蘇の司ビラパークホテル 1階 フラワーホール
- ◆ テ ー マ：知の集積～地域が世界に飛躍する瞬間～
- ◆ 出 席 者：五百旗頭 真 委員（公立大学法人熊本県立大学 理事長）
近藤 誠一 委員（前文化庁長官）
蒲島 郁夫 （熊本県知事）

【開会あいさつ：蒲島知事】

皆さん、こんにちは。今日は、くまもと未来会議リレー講演の第2回目を開催しましたところ、たくさんの方々に来ていただき、誠にありがとうございます。

これまで、くまもと未来会議では日本の第一線で活躍されている方々に、熊本の可能性についてさまざまな観点からご意見をいただいております。今年度、委員の方々とともにこの阿蘇に来て、阿蘇の素晴らしさを皆さんとともに語りたいと思い、この阿蘇の地でリレー講演をすることにしました。

私は、知事になって2期目であります。2期目の4つの目標は、1つは、活力を創ること。2番目は、アジアとつながること。3番目は、安心を実現すること。そして4番目が、百年の礎を築くことです。その中で「知の集積」というのが、私の大きな目標の一つです。それは、百年の礎の中でも、とても大事なものではないかと思っています。そういう意味で、未来会議というのは「知の集積」の一つの現れであると考えています。

今、熊本県では、人類共通の宝として未来に引き継ぐために「天草のキリスト教関連資産」や「旧万田坑・三角西港」など世界遺産登録に向けて準備を進めています。

そして、この阿蘇の地も世界遺産登録に向けた取組みを推進することとしています。この百年の礎のために、世界遺産登録に向けた取組みが、市民の方々の大きな参加によってできることを心から希望しています。阿蘇では、既に今年5月に世界農業遺産に登録されました。そして、世界ジオパークや世界文化遺産をめざした様々な取組みが進められています。その中で、9月には一つの大きなステップがありました。それは、日本ジオパーク委員会により、世界ジオパークネットワーク加盟への推薦が決定されたことです。この推薦により大きく動き出したのではないかと考えています。

また、10月には、阿蘇が世界文化遺産にふさわしい、素晴らしい価値や魅力を具えている資産であり、私たちが世界文化遺産登録に向け、着実に歩みを進めていることを広く皆さんに知っていただきたいと考え、東京において阿蘇の世界文化遺産登録に向けたシンポジウ

ムを開催して、多くの皆さまに参加いただいております。まさに阿蘇は世界に羽ばたこうと
しています。

また、私は5年半前に知事になりましたが、最初の知事選の時にも、私のマニフェストの
中で「この素晴らしい阿蘇を、是非世界文化遺産にしたい」ということを述べています。5
年半経って、まだそれは叶っておりませんが、少なくとも世界文化遺産登録に、一歩一歩踏
み出していこうとしているのではないかと考えています。まさに、そのとき、この阿蘇でリ
レー講演が開催できることは、とてもうれしく思います。

本日は、五百旗頭委員、近藤委員には、それぞれの立場から幅広い意見をいただきたいと
考えており、よろしくお願いいいたします。このリレー講演が成功裏に終わることをお祈りし
て、私のあいさつにしたいと思います。

講演「知の集積～地域が世界に飛躍する瞬間～」

【講演：公立大学法人熊本県立大学理事長 五百旗頭真委員】

皆さん、こんにちは。静かな地での集まりかと思っておりましたが、こんなにたくさんの方々
がお集まりで、驚いています。今日は、また素晴らしい天気の中、雄大な阿蘇山を依山の方
から案内していただき、大観峰とはまた違った多様性のある空間を楽しむことができました。

初めに、私の体験を三つ申し上げたいと思います。まず、私は神戸の六甲学院で中学高校
を過ごしましたが、その学院の修学旅行で初めてこの阿蘇の地に来たのです。瀬戸内の航海
で夜行だったと思います。別府に入港し、別府からはバスにりましたが、今走っているこ
の道路が大変快適で高速道路的な「やまなみハイウェイ」だと教えられました。1960年
代だったかと思いますが、できたてで非常に最先端であり、素晴らしい景観の中を走るハイ
ウェイだと予習も受けていました。バスガイドさんが熱心な人で、我々高校生にしっかり覚
えて帰るように歌唱指導して、「阿蘇は朝霧、夕べは夜霧よ～」と歌わされたものです。
阿蘇山に来ると、残念ながらその日は火口湖のあの緑色は見えなかったのですが、それでも
何と雄大な景色かと非常に感銘を受けました。

そして、熊本市の方に下って水前寺公園に行くと、当時こんこんと下から水が湧き出てい
たのです。そこで、もう一度「阿蘇」に感動しました。阿蘇山で降った雨が、百年、二百年
をかけて、今ここで湧き出ています。都会の中で、こんなふうになんて水が湧き出るな
んて、すごいことだと思いました。

その後、宇土半島の三角港から船に乗って島原に渡り、雲仙の地獄巡りも印象的でしたが、
私は、やはり阿蘇山と水前寺公園が一番感銘深かったです。それが、初めて阿蘇と出会った
私なりの原体験です。

11月8日に、「九州横断長崎・熊本・大分観光振興議員連盟総会」が熊本市内でありま
した。長崎、熊本、大分という「九州横軸」の観光振興をテーマにした3県の政治家の方々
の集まりは、大変活気に満ちていました。私は、思えば約50年前に、高校の修学旅行で「九
州横軸」そのものを体験していたわけです。本当に感銘深いことです。

ところが、少し遺憾に思うのは、それ以後、日本は最先端国家になる中で、高速道路や新幹線ができてどんどん進んでいるのに、どういうわけかこの「九州横軸」は、私がやまなみハイウェイで感動した時のままです。国道57号線は、阿蘇の中に入ると今だに片道一車線で、渋滞がひどいのです。

去年の7.12熊本広域大水害では、蒲島知事のご指示によって、私も被災地を視察させていただきましたが、ひどいものです。沢のようなところが土砂崩れになるのであれば分かりますが、あれだけの雨が集中して斜面に降れば、沢でも何でもないただの斜面が爪でこそげとったような潰れ方をして、その下にお住まいの方が犠牲になっています。ある意味、地球温暖化の中でそれは起こることなのです。これから度々どこで起こるか分からないので、それに備えなければなりません。災害が起こってから「しまった」とどこでも言うのが、しっかりと基幹道路をつくっておかなかったということです。

私は、阪神淡路大震災の現場にいました。被災者で我が家は全壊です。そのときに、地域の方が天を仰いだのが、なぜほとんどできていたのに、山手幹線をもう少し頑張って造っておかなかったかということです。一部の地域の方がいろいろ意見を言って動かないものですから、山手幹線はまだできていなかったのです。海の方から、高速道路と国道43号線があり、昔からの国道2号線、そして山手幹線となるはずが、これができていませんでした。43号線が大動脈ですが、地震によって高速道路が崩壊しました。皆さん、ご記憶の方がおられると思いますが、43号線もまともに動けなくなったのです。山手幹線が完成手前で通っていないので、2号線に全部が集中したのです。家族を心配して来る人や怪我人を急いでどこかの病院へ搬送する人、それから自衛隊や救援者も全国から来るのですが、全く動きません。なぜ、二重にしておかなかったのでしょうか。細かいことを言わないで、山手幹線を協力して通していたら、一般の個人の車は山手幹線でどうぞと、2号線は救援車オンリーで両方動きます。なぜそれをしておかなかったのかと天を仰ぐことになるのです。

このたび東日本大震災でも、ご紹介いただいたように復興構想会議議長をやりましたが、三陸海岸は国道45号線が海沿いの町をクネクネとつないでいる幹線道路です。しかし、津波によってズタズタで、がれきの中に埋もれてしまうという事態になったわけです。その時に「しまった」と言ったのが、その三陸海岸線沿いの高速道路で、縦貫道路というのを造っていたのです。気仙沼と陸前高田のところは、山越えるのにその高速道路を使えます。部分的には使えますが、その後は止まってしまっています。もし、しっかりと高速道路を造ることを考えていれば、45号線は津波でズタズタでしたが、高速道路は高い橋げたとトンネルでつないでいますので、全くやられていなかったのです。やられてから分かるのです。「しまった」と。

その意味では、去年の7.12で国道57号線がズタズタになりましたが、この地域社会全滅的な大災害が来る前に、大きなウォーニング、イエローカードを出してくれたのです。そういう意味で、横軸をしっかりとやらなければなりません。

私の驚きは、昔50年前に来た時から、基本的にこの横軸の幹線が変わっていないということです。57号線とやまなみハイウェイ以外何もありません。これをしっかりと高規格化します。四車線化もそうですし、高速道路というのも持たなければなりません。なぜならば、

熊本は九州全体の中心都市で、何か事があれば大分県の竹田にも、あるいは宮崎県の延岡に対しても救援活動をします。南海トラフが大きく動いたとき、宮崎平野は津波に襲われることになるでしょう。鹿児島県の志布志湾もやられるでしょう。そして、日向灘それ自体にも震源の巣窟があるのです。九州全体の広域安全ということを考えれば、今、南北軸は新幹線もあれば高速道路もしっかりしています。しかし、熊本からの東西といった大分へも延岡へも、トボトボと行く脆弱な道一本しかないという状況に、放置しておいてはいけないと思う次第です。

そのことが、実は観光の面でも大きいのではないのでしょうか。あの頃、私だけではなく、近藤前文化庁長官も、湘南高校の修学旅行はやはり九州だったそうです。ですから、定番みたいなものだったのです。全国の憧れでした。今、その比率は減っていると思います。ここへ来る絶対数が減っているかどうかは知りませんが、他の所が増えていると思います。どうしてでしょうか。それは、通常旅行業者が三日間、一週間とプランニングします。そうすると、阿蘇は魅力なのですが、今のこの57号線状況を考えますと「あそこへ行ったらそれだけで一日なくなってしまう」、「立野などでやはり渋滞に巻き込まれてしまう」ということになってしまうのです。

この横軸は、生活産業や急病が出たときの個人の搬送、重大災害時の基幹でもあります。日常的にここに住む人の安全にとって非常に大事です。同時に、観光資源を生かすという意味でも、是非横軸を頑張りたいものだと思います。

先週、その九州横軸の集まりのための勉強をして驚いたのですが、阿蘇は、50年前の道路事情を基本的に変えずにいます。他はどんどん高速道路化して、そちらが使い勝手が良くなっています。だから、九州では、湯布院も全国的に評判になり、もちろん長崎は魅力的で、福岡にはますます集中し、桜島と指宿の鹿児島も魅力があり、だいぶ阿蘇の比重が下がって埋もれているかと思ったのです。ところが、観光にやってきた人の総数は依然として阿蘇が九州1位です。一年間に1700万人の観光客が、この阿蘇地域に来ています。これは、他を圧しているのです。どれだけこの観光資源の魅力が素晴らしいかということです。少し誇張して言いますと、こんなにさぼっているのに、それでもまだ一位なのです。だったら、少し磨いたらどうでしょう。大自然を汚してはいけない、手を付けない方が良く、昔のままの方が良い。これは、よく現代の人が口にする勘違いです。

私の住んでいた阪神は、60年代から70年代にかけて、どんなに公害がひどかったことでしょうか。阪神電車や当時の国鉄に乗ると南側の窓が開けられないのです。尼崎の臨海工業地帯の排煙公害、排ガスがひどくて、電車の中にもむせるので、窓を閉めなければいけないくらいひどかったのです。瀬戸内海も、赤潮で濁ってしまっただけで使いものになりません。「それは工業化の宿命なので、科学技術文明は駄目だ」と言う私の友人や先輩がおられました。しかし、今、瀬戸内海はきれいになっています。今、尼崎を電車でも通っても「臭い」などと誰も言いません。それどころか再開発されて、非常に魅力的なターミナルになっています。

つまり、方向を間違っただけではいけません。かつて、めちゃくちゃに環境を潰しながら、工業化や科学技術を使いました。しかし、人々の幸せになるように、人々にとって素敵なものに

なるように科学技術や工業化の諸能力を使うのであれば、一度死んだと思われた瀬戸内海は見事に蘇っています。川もきれいになっています。しっかりと下水道のシステムができ上がれば、そうなるのです。

そういうふうに、もともとあった自然を汚してはいけないと言うのではなく、自然に更に輝きを増すような、それを改造してサポートするような良い人工の仕方で、多くの人がそれに接することができるようにしています。そういう知恵を持ってすれば、この阿蘇という断然ナンバーワンの自然資源が、文化遺産になるのは当然だと思います。それを、誰もが現実にしていくという意味で、横軸インフラの弱さというのを克服して、是非そうやっていただきたいというのが、今日申し上げたい一点です。

前置きの三つ申し上げたいと言いながら、1番目の修学旅行体験の中で少し本道の方に入って行ってしまいました。2番目に申し上げたかったことは、35年ほど前にハーバード大学で蒲島青年に会ったというエピソードです。私は、ハーバード大学で1977~1979年の二年間にわたり長期滞在して研修しましたが、そのときに、少し他の日本人と変わった青年に会いました。

だいたいハーバードというエリート大学へ来る人は、「自分はエリート官庁から派遣されて来ました」「大企業から研修を命ぜられました」とか、「日本の一流大学から留学してまいりました」という人が多いのですが、そういう方々と違って、アメリカの大地を自分の足で踏みしめて、気張っているわけではないのですが、全く淀みなく自分の大地としてしまっているような人が蒲島青年でした。例えば、熊本県の山鹿の寒村に生まれて貧しい農家で暮らしながら、農業の研修生としてネブラスカ大学へ行きました。そして、改めて留学し、若くせに「蒲島理論」とアメリカで言われるような「豚の交配」についての新しい発見をし、理論化して、それなりにエスタブリッシュしているのです。

ただ、蒲島青年は、豚よりはやはり人間に関心があり、特に、政治が面白いと思われたようで、大学はネブラスカで大成功だったのですが、大学院についてはハーバードの政治学の方に来られました。たまたまその時に、私が広島大学助教授として、アメリカのACLSという学会連合のようところの奨学金を得てハーバードで研究することになりました。私は日本政治外交史専門で、蒲島さんはシドニー・ヴァーバの下で博士論文を書いていたのです。先週シドニー・ヴァーバに再会されたそうですが、当時彼が行っていたのは、意識調査のデータなどを基にしながら世界22の民主主義国を数量的に比較分析することです。

ただ、22カ国の民主主義国を比較すると言いながらも、やはり日本人として日本政治に関心があるので、その面でライシャワー教授を3人のアドバイザーの一人にされていました。私はたまたまライシャワー教授の隣にオフィスをいただいたので、蒲島さんがそこへやってきて会うという偶然遭遇の機会を得たのです。それで、少し日本人離れした素晴らしい日本人がいるというので親しくなり、その後ハーバードで博士号(Ph.D.)を取得して日本に帰国し、筑波大学や東京大学の教授として活躍されます。

政治学という分野が一緒ですので、例えば、蒲島教授のイニシアチブで、日本とヨーロッパの政治学者が熊本で共同研究をするというプロジェクトがありました。蒲島教授が熊本で開くという提案をされてそうだったのです。私たちは、熊本市のホテルキャッスルに缶詰め

になって、政治学の比較、政治の議論をいろいろやった後、「エクスカージョンがあります」と言って、蒲島さんが先頭に立って阿蘇へ連れてきたのです。

私にとっては二度目だったのですが、蒲島さんは「こんなに素晴らしい阿蘇があるんだよ」「熊本城があるんだよ」ということを、日本とヨーロッパの政治学者に見せたいのだな、愛郷心が強いのだなと思いました。喜々としてやってくれたので、非常に良い集まりになりました。

更に私がたまたま政治学会の理事長をやっている時に、蒲島さんは国際交流の責任者で、世界政治学会（IPSA）の大会を、初めて日本で開くというのに福岡で開催されたということで、この蒲島さんの学者と思えないリーダーシップ、行動力に、非常に私は楽しませていただきました。楽しんでいるとやはりタダでは済まないもので、防衛大学の校長が終わる頃に、「五百旗頭さん、少し熊本県立大学を手伝ってくれない」と言われ、何しろ、今まで蒲島さんとご一緒して悪かったためしがなく全部楽しいものですから、ついつい、今度もきっと良くなっていくという思いを持って県立大学にお招きいただくことになったというのが2番目のエピソードです。

3番目について、私は、外務省の方とは割とお付き合いが多い方ですが、近藤さんがパリのOECDで働いていらして、近況みたいなものを配ってくださることがあり、私もそのうちの一人に入れていただいたのが縁で親しくさせていただくようになりました。OECDと言えば世界の先進国経済の組織なので、難しくいかめしい経済のお話が多いのかと思ったら、非常に文化的で人間的な素敵な人だなという思いを持ちました。そして、東京に帰ってきて文化関係の長になられた時に、ノーベル賞を受けたアマルティア・センを呼んできて、東京で「世界文明フォーラム」を開かれたのです。その時に、私にも声を掛けてくださり、日本側の打合せをご一緒させていただきました。

細かい具体的な問題で経済政策や伸び率の話になると日本人は得意なのですが、文明のあり方をどうするのかということになると、日本では話が大き過ぎて難しい。縦割りでの一つの個々のことについて確かなことを言えるというのは、実務の人でも学者も結構いるのですが、大きな世界の文明の中での日本ということになると、なかなかできません。そんな中、近藤さんは内外の世界的一流の人を集められて素晴らしい会議になりました。一回だけで終わるのは惜しいと思っていましたところ、デンマーク大使になられた後帰国し、文化庁長官として昨年、二度目をやってくださったのです。今日はそういう素晴らしい方と一緒に、このシンポジウムができるということを光栄に思っている次第です。

阿蘇の地、熊本、九州。大自然の景観と歴史の豊穡というのが、大変誇るべきものだと思います。非常に古くから、この九州の地は、文化文明の交差点、世界の文明にとっての戦略的要地としての意味を持ってきたと思います。

この阿蘇から外輪山を少し下ったところに「鞠智城」があるのは、もちろんここにおられる方々をご存知でしょう。蒲島さんは、その鞠智城のすぐ近くの山鹿の農家として生まれ育たれました。蒲島さんによると、子どもの時、子どもたちで丘の上の鞠智城跡に登って土を掘っていたら、黒い焦げた米が出てきた。「何だろう」と聞いたら、おばあさんが「あそこには魔女がいて、そういう不思議なことがいっぱいあるんだ」というお話をされたそうです。

ところが、70年代ぐらいから発掘調査が進んで分かってきたことは、古代の大変重要なお城だったということです。663年に白村江の戦いで、日本は2万7千の大軍を朝鮮半島に送り出して完敗しました。

なぜ、そういうことをやったかと言えば、660年に百済が、唐、新羅の連合軍に攻撃されて滅亡したのです。当時、朝鮮半島は、北の方に高句麗、右の方に新羅、左の方に百済という三国時代でした。その三カ国はみんな日本と付き合いがありましたが、百済が一番仲良しでした。百済は、軍事的には三カ国の中で一番弱く、どちらかと言うと通商国家です。高句麗は、背後に遊牧民族の血を引く強い陸軍国です。その圧迫でやられそうになるのです。三カ国ですから、いろいろな組み合わせをしながら凌いでいました。

その中で軍事的に弱い百済は、背後の沖合の大和を敵にしたら挟み撃ちされては生きていけないので、大和との関係を非常に大事にします。大和の人も百済を好きになる理由は、百済観音をお考えいただいたら分かるのですが、大和の人は非常に好奇心が強く、文化的な向上心があり、良いものが分かるのです。東シナ海の藻くずになる危険を冒してでも、鑑真和尚を連れてくるような熱くなる場所があります。

そういう好奇心豊かな大和の人に、百済の人が応えてくれるのです。彼らは貿易国家ですから、南宋の方の新しい文物や器、経典などを大和へ持ってきます。そうすると海外にある素晴らしいもの、優れたものに奮いやすい大和の人は、「ああ、素晴らしい」と言って、百済との関係を大事にしていたのです。

その百済が660年、唐、新羅の連合軍に滅ぼされました。そして、唐が入ってきて三国だけではなくなくなったのですが、唐の軍隊が引き揚げた後、百済のお国再興運動が起こりました。あちこちで蜂起して一定地域を取り返し、「大和に人質に入れていた皇太子を返してほしい。加えて、大和から是非援軍が欲しい」と言ってきたのです。

これは重大な決断です。日本の本土を超えて、大陸に進出すべきかどうか。もし、後に秀吉がやったみたいに「俺は明を制圧するのだ」と言ってやるのなら、「来るんじゃない」と言うかもしれません。しかし、仲良くしていた百済がやられて、そのお国再興運動が起こり、しかも、自分たちのところに一緒に住んでいた皇太子を新しい王にするのです。もし、これを応援して成功すれば、その朝鮮半島の三分の一は、言うならば日本の特に親しい影響下に入るわけです。当時は斉明天皇という女帝の時代だったのですが、実力者は中大兄皇子であり、彼の決断で、この際は百済のお国再興を助けて大軍を送ろうという決断をしたわけです。

そこまではそれなりに分かるのですが、戦をしようというのなら、大事なのは現地の事情をよくわきまえることです。後の秀吉もそうでしたが、どうして日本は大陸に打って出るときに、現地の人々の心を掴むということができないのでしょうか。

秀吉のときも、加藤清正が先鋒になって、日本海側の、今で言うとロシアの国境地帯までものすごい勢いで攻め込んで連戦連勝でした。鬼將軍と恐れられ、軍事的天才である加藤清正であっても、次第に苦しくなって進めなくなってきた時に、蔚山城というところに築城して拠点にしようとしていたら、城ができる前に明と朝鮮の連合軍が大挙して攻め込んで包囲したのです。

加藤清正は七本槍で、勇猛な武将というイメージが定着していますが、勇猛果敢だけでは、

調子に乗っているときの勝ち戦はできますが、負け戦のときはもたないのです。負け戦のときに本当に力を発揮できる人が本物の将帥です。もう、特にあの時は武器も兵糧も無く、12月ですからものすごい寒さです。日本とは違います。ただ生きているだけでも大変な中で、みんな奮戦しました。どうしてでしょうか。それは、加藤清正が優れた将帥だったからです。そういうときに、みんなを統率してしっかりと指揮でき、耐えられるというのは本当の将軍です。

頑張っていたところ、黒田官兵衛の息子長政の部隊が救援に来てくれたのです。救援となると、今度は逆に包囲していた明と朝鮮軍が挟み撃ちに遭う危険があるので、彼らはやむを得ず撤退に移ります。城内は食べるものもほとんど無くなっていましたから、もうみんなそのままへたりこんでしまいたいぐらいに大変だったのです。ところが、加藤清正は大号令を出して「追撃せよ」と言って走らせるのです。そんな余力があるわけありません。でも、人間の心理というのは、もう駄目だと思っていたところに援軍が来て、そして敵が逃げかけているその時に追撃をして勝利をはっきりさせるのなら、力がなかったはずでもできるのです。そういう心理まで読んで部下を動かした指揮官加藤清正でした。

加藤清正は、以上のように攻める場合も守る場合もよくできました。黒田官兵衛らは、割と現地の人々の心を掌握することに努力をした、秀吉軍の中で例外的な存在です。概して言えば、心を捉えるということが十分できずに、秀吉は大きな間違いを犯しました。手柄を立てた将軍に、敵をやっつけた証拠として耳や鼻を削ぎ落して持って帰らせるものですから、非常に残虐な仕打ちをすることになります。首級を挙げるとか、首級が重いなら鼻と耳でよいということをやると、現地の人からしたら何て野蛮なことをするのだということになります。

海外へ出て行くときに、人々の心を捉えておくことに配慮が足りません。のみならず、現地の地理、気候まで掴んでいないということが、この白村江の戦いの敗因として日本書紀にも書いてあります。「気象も知らず」、川の河口付近の潮の流れの状況を十分に掴まず、この大軍で行けば敵はクモの巣のように逃げるであろうから、てんでに手柄を上げよという作戦なしの命令なのです。そういう中で、それを読んで待ち受けた唐、新羅の連合軍に完敗したというのが白村江の戦いの悲しい歴史です。

それは、誠に残念ですが、敗戦して逃げ帰った後、日本史は立派になるのです。その後50年は、日本史にとっての躍進期です。それまではアジア大陸沖合の島国でしかなく、文化的に遅れたものであったのですが、敗戦の後50年は、二重の対応を行いました。一方ではこれは国難であり、唐、新羅の連合軍は必ず攻めてくるだろうというので防備を懸命に固めました。対馬には金田城、最後奈良盆地に入る前の生駒山には高安城を造り、その間にたくさん城砦やのろしの通信システムをつくって防御するということをやっています。しかし、大きなポイントは大宰府の防衛戦でした。敵の唐、新羅の連合軍が日本に攻め込んできたとしたら博多湾に来るでしょう。そこで補給する拠点もつくりずにそのまま瀬戸内海を走って、難波の津まで行ったときに、伸びきった補給線は危ないです。ですから、大事なことは北九州を唐、新羅の支配下において、そこをしっかりと中継拠点にしながら大和を攻めることです。これは軍事的に常識です。

当時、博多はまだ商人の町が少しあったぐらいですから、この地方の中心として大事な

は大宰府なのです。大宰府を守れるかどうか、唐、新羅が攻め込んできたときの分かれ目になるというわけで、それを守るために大野城と基肄城という山城を造ります。その下には水城に堤防を造って大宰府を守ろうとしたのです。しかし、唐、新羅の、あの二日にして全滅した白村江の戦いを思えば、向こうの力は圧倒的で、果たして、大宰府を山城・水城で守り切れるかどうか分かりません。籠城戦になったとき、あるいは落とされたときどうするのでしょうか。そのときのために鞠智城を造ったのではないのでしょうか。大野城、基肄城とほぼ同じ時に造ったということが明らかになってきました。

大宰府の南62キロメートル、鞠智城。そこには、出るわ出るわ、蒲島少年が掘り当てた黒い米だけではなく、その元にあった米蔵跡が出てきたのです。食料をそこに備蓄していたのです。そして、武器庫も出てきました。兵舎に防人を収容して、戦うための拠点にしていたわけです。行政ビルや、対になっている百済型の八角形の鐘楼二本の跡も出てきました。日本にはないが朝鮮半島では好みだったものが、一緒に逃げて来た百済の技術者の指導でできたのでしょう。78も建物の跡が出てきたのです。つまり、それは大宰府に対する後方支援の拠点であるとともに、万一大宰府が落ちたときには、鞠智城を中心にして九州の統治とか、あるいは唐、新羅連合軍に対する反撃拠点にするつもりであったと考えられます。

唐、新羅が攻め込んでくる危険がなくなった後の200年余りにわたって、鞠智城は活動しています。古代7世紀から造られて、斜面は少し急ですが、上は平らです。その跡がかくも鮮明に出てきて、これは、日本にとって超一級の歴史遺跡だと思います。そういうものが近所にあるのです。古くは彩色された古墳群というのがありますが、明確に古代日本の歴史が出てきました。それも、非常にリアルな大陸との関係の中で造られたもの、それが鞠智城です。

その後、13世紀には蒙古軍が攻めてきます。その時に行われたことは、唐、新羅の連合軍が攻めて来るときに対応しようとした安全保障体制と基本的には同じことです。

日本は白村江の戦いに負けた後50年間、懸命の努力をして、50年後の710年平城京を造りました。ローマ帝国衰退後、当時世界で一番優れた文明水準にあった唐の都と同じものの縮小版を大和盆地に造ったわけです。そのことは、最高文明水準をほぼこなしたということを示しているわけです。

その後も、「天平の薨」のように鑑真和尚を連れてくるなど、8世紀の間、ある意味で中国の文明から学ぶということをして、日本はほぼ高い世界水準を共有するということができたと思います。

坂の上の雲の時代に、ペリーの黒船にやられた後50年、日露戦争に勝つことで近代西洋列強とやっていけるぐらいになって初めて、日本は世界文明水準になったと思っている日本人が多いのですが、それは違います。7世紀、8世紀に日本は一度世界文明水準に達したのです。大したもの。それ以後、紆余曲折、上下振幅がありますが、そんなには落ちていません。鎖国をしていた時に、イギリスが産業革命を起こしたので、黒船の時に大ショックを受けるのですが、しかし江戸時代だってそんなに悪いわけではありません。識字率は西洋諸国と当時変わらないのです。日本の方が良いとも考えられます。藩校だけではなく、寺子屋でもみんな非常に熱心に勉強したのです。文化水準の高さというのは源氏物語一つをとっ

ても分かります。

軍事水準も、蒙古というユーラシア大陸を席卷した世界最強軍団が上陸すらできなかったのです。みんな、神風が吹いて台風で船が沈んだから、蒙古は負けて帰ったと思っているでしょう。そんなことは問題ではないのです。もし、本当に蒙古が世界最強で、日本が田舎国で軍事水準に落差があったら、簡単に北九州上陸して大宰府を取り、北九州を拠点にしてしまえば、台風が来ても致命傷にならないのです。ところが、最初4万で来た時には、初日に大宰府前面まで攻め込んだのです。さすが蒙古軍です。だけど、ばかにならない日本の侍たちの抵抗能力というのをみてとって、日本の侍は夜襲が好きだということを勉強していたでしょう。陸地で寝たら、明日の朝が迎えられるのだろうか。指揮官の命令で全軍撤退して、海へ帰って船で寝たのです。大宰府までは二度と来ることができませんでした。二度目は14万の大軍で来たのに、結局は大宰府すら取れなかったのです。ということは何を意味するか。日本の侍たちの軍事水準が、世界最強の蒙古軍団とあまり差がなかったということなのです。やり方が違うところがあるし、蒙古軍は大砲みたいなものや、少し変わった武器を持っていましたが、それをそれと分かって対応したら負けないというものでした。軍事的にも、文化的にも中国の漢字を基にした「かな文明」をつくって、女性も素晴らしい文学を書けるようになった日本の水準は、なかなか高いのです。

だから今、日本は失われた20年でもう駄目だと、少子高齢化で見込みがないという人がいますが、何て見当違いでしょうか。何が駄目でしょうか。駄目なものがあるとしたら、そういう衰退宿命論が駄目なのです。もう駄目だと思っていることが、日本を駄目にしていくのです。ネブラスカの大地を踏みしめた時、「俺は行くぞ」という気概があれば絶対大丈夫です。できれば、世界をそのように知った上で、この熊本の地には素晴らしいリソースがあるので、是非とも輝かせていただきたいということが、私の申し上げたいところです。国防において安全保障、特にこの地域の防災という面で、熊本は卓抜した戦略的位置、要地になります。それを生かして、九州の各県が、熊本がいてくれるおかげでわれわれも安心できる、一緒になっていろいろなことやろうという思いを持てるような進展を期待している次第です。どうも長い間、ご清聴ありがとうございました。

講演

前文化庁長官 近藤 誠一

皆さま、こんにちは。先ほど来、過分なご紹介をいただいております近藤誠一です。この7月8日に文化庁長官を辞めました。「ちょうかん」を辞めて「ゆうかん」になりました。暇があるという意味の「有閑」です。と思っていたのですが、実はいろいろ事後処理や、今日のような機会に恵まれて、かなり忙しくこの4カ月を過ごしてまいりました。

本日は、この第2回のくまもと未来会議のリレー講演、お招きをいただいて大変うれしく、かつ光栄に思います。47人おられる知事の中でも、私が最も尊敬する蒲島知事がいらっしやいます。また、五百旗頭先生は、先ほど先生ご自身からご紹介もありましたように、かなり前からいろいろな仕事の面でお世話になり、ご指導をいただいた大先生です。そのお二方

からお声を掛けていただいたということで、もう何をさておいても熊本に来ようということで今日は参った次第です。

先ほど、五百旗頭先生からご紹介がありましたように、私も実は初めての熊本・阿蘇訪問は高校の修学旅行でした。今からちょうど50年前のちょうど今ごろ、高校2年の秋でした。九州を時計回りに一周し、神奈川県藤沢市の湘南高校ですからずいぶん贅沢な旅行だったと思いますが、大変強い印象を持っています。阿蘇の雄大な眺めは子ども心に目にしみついています。

本日は、このリレー会議のテーマに若干関係しており、かつ最近富士山の世界遺産登録やその関連で三保の松原の逆転登録ということもありますので、その辺りを少し絡めながら、このタイトルにありますように、これからの日本、特に地域再生にとって何が切り札か、そこで文化芸術や世界遺産といったものがどういう役割を果たすのかということについて、私の持論をご紹介させていただきます。

私は、ちょうど40年間の宮仕え - つまり政府での勤務 - のうちの半分近い20年近くは海外で暮らしてきました。したがって、これからお話することは、5～6年ごとに出たり入ったりしながら、この日本がちょうど今の中国のように勢いよく昇っている時、そして20年ほど前にバブルがはじけて、だんだん内向きになり閉塞感が増してきた時、そういう祖国の状況を眺めてきた、その率直な印象というものがベースになっています。

今日お話ししたいことは、三つあります。第1は、今の日本の閉塞感を打開する鍵の一つは、文化芸術の力をもっと社会に浸透させるということです。そして、日本にはそれをやるにふさわしい素晴らしい文化力、芸術力、歴史、伝統といったものがあるということです。二つ目は、そういった力を発揮する主役は地方であり、地域、地方都市であるということです。これは、80年代からヨーロッパで始まった流れです。東京だけではもう日本を救うことはできないという感じです。三つ目は、では具体的にどういうことをすれば地域が活性化し、日本を再生させることができるかということです。その一つが世界遺産であろうということで、その三つをお話しします。最初に結論を申し上げましたので、途中で眠くなった方はどうぞ安心してお眠りください。

まず、いろいろな状況をデータで見たいと思います。これは、OECDという国際経済機関が出した「Your Better Life Index」という統計です。文化芸術というのは、なかなか客観的なデータがないので、どうしても世論調査やこういう国際機関の調査に頼らざるを得ませんが、これは、先進国36カ国の中で、総合的に暮らすという点でどこが一番優れているかといったことを調べた、信頼できる国際機関のデータです。「所得・資産」を合わせたものを見ると、米国が1位、日本は6位、そして、私が3年前までおりましたデンマークは17位です。「教育」は、日本が非常に高いということをご承知のとおりですが、フィンランドが1位で、日本が2位です。「安全」も我々はよく知っていますが、日本が世界一安全な国です。ところが、「生活の満足度」あるいは「幸福度」で見ると相当低いのです。一つだけのデータでは不十分ですので、別のものをご紹介します。

総合ランキングと書いていますが、これは経済などの一分野でのランキングではなく、いろいろな指標を総合的に勘案して順位付けしたものです。いろいろな機関がいろいろな調査

をしています。まず、UNDPという国連関係の機関が「人間開発指数」というのを出しています。GDPだけでは人間の社会の素晴らしさは測れないということで、それ以外の教育、福祉などを含めた様々な評価を総合して作ったインデックス表ですが、それで見ると日本は10位です。トップの方は、だいたい北欧諸国が入っています。それから、Newsweekというアメリカの雑誌が似たような総合ランキングをやったところ、日本が9位でした。それから、少し前になりますが、リーダーズダイジェスト誌が、おそらくアンケート調査だと思いますが、それをやってみると、「住みよい国」は我が日本は12位でした。経済だけではなく総合的に見ると、だいたい日本は世界で10番目前後にいるのだなということが分かると思います。

ところが、「幸福度」で見ますと、よく引用されるレスター大学の先生が少し前に行った調査では、デンマークが1位、日本は90位です。OECDでも似たような調査をやっています。結果はほぼ同じで、デンマークが1位、日本は34カ国中26位で半分以下です。

逆にちょうど、幸福とは反対であろう「自殺率」というのがたまたま同じOECDの統計にあったのでそれで見ますと、日本は、よく年間3万人といいますが、先進国の中でも3番目に自殺が多いのです。1位は韓国だったと思います。つまり、先ほどの統計でも、いろいろな客観的なデータと比べて、主観的な「生活の満足度」「幸福度」は低いと出ましたが、いろいろなデータを総合しても、ほぼ同じような結果が出ているということです。もちろん統計というのは大変な誤差がありますし、特にアンケート的なものは聞き方によって、あるいは国民性によって結果が随分左右されることはあると思います。

それにしても、このギャップはあまりにも大きすぎると思います。やはり何かあるのではないかということを感じざるを得ません。どうやったら幸福度を上げられるのかというのは、非常に重要な、しかし難しい課題です。蒲島知事が最初の立候補の時から胸に抱き、そして、既に実行しておられるこの幸福度をいかに上げるかというのは、大変タイミングの良い、時宜を得たイニシアチブだと思います。

次に、このデータがある程度実態を表していると仮定して、では、なぜなのかと考えてみます。客観的に見れば日本はどんな角度から見ても世界10番目ぐらいなのに、幸福度だけはどうしてこんなに低いのかということが当然疑問になります。理論的には、もう日本人はエコノミックアニマルになってしまって、幸福などどうでもよいのだと、お金が稼げればよいのだと思っていることが考えられます。つまり、心の豊かさなんてあまりもう求めない国民になってしまったのかという疑問も湧きますが、それはとんでもありません。

内閣府の調査で、「あなたは心の豊かさと、ものの豊かさどちらを求めますか」という質問に対して、高度成長期ぐらいまでは両者相半ばしていました。それが、次第に経済が発展してくるにつれて心の豊かさを求める人が増え、今や6割に達し「ものの豊かさ」の人は4割に減っています。これは世界的にも言えることで、ある程度の経済レベル、所得レベルになれば、人は普通、それ以上のお金を儲けるよりも心の豊かさを求めるようになります。今、日本がその典型です。つまり、心の豊かさを求める気持ちは十分に強いということです。

特にここにありますように、日常生活の中で文化芸術を鑑賞したり、文化活動を行ったりすることを「非常に大切」、「ある程度大切」としているのは9割です。世論調査で9割とい

うのは大変な意味があると思います。そして、子どもの文化芸術体験について、「重要である」と答えた人も9割を超え、これは一種の無視のできない統計的な数字であるし、これからの社会を考えていく上で、決して無視してはいけないことだろうと思います。

では、国民の中にこれだけの心の豊かさ、あるいは文化を求める気持ちがあるのに、それが満たされていない、その結果、幸福でないのはなぜでしょう。それは、その需要に見合う供給がないからでしょうか。いや、そんなはずはないです。日本には素晴らしい伝統文化や思想が残り、素晴らしい自然が残り、あるいは人材を見ても、芸術、スポーツあるいは科学技術、至るところで世界の賞をとっています。もう毎月のように、どこかのコンクールで日本人がピアノやバイオリン、バレエで入賞しています。スポーツも、なでしこジャパンは少し古いですが大変な活躍です。それから、山中先生のノーベル賞、数学でのフィールズ賞など日本人個人には素晴らしい才能があります。そして、素晴らしい文化遺産が残っています。

日本は異民族の征服がなかったことから、古い文化財がしっかり残っています。そこがヨーロッパや中国との違いです。ヨーロッパ、中国にもたくさん残ってはいますが、異民族の侵略の度に多くが破壊されています。特に無形文化財といわれる伝統芸能、伝承、民話といったものは、随分ヨーロッパ、中国で壊されています。日本では、それらがふんだんに残っています。つまり、文化芸術に対する供給は十分にあるのです。普通は、経済学者は需要と供給があればマーケットができると言います。しかし、どうも文化についてはそうでもない。つまり、需要と供給があっても、それをつなぐシステムが有効にできていないということではないかと私は思います。これは、私が長くいたフランスなどのヨーロッパと比べて感じるところです。

例えば、ある三ツ星級のシェフがいたとします。それから、おいしい食事が食べたいという人がいたとします。その二人を並ばせて座らせても何も起きません。しかし、レストランがあり、素晴らしい厨房があり、そして毎朝、マーケットに新鮮な食材を買いに行く車とそれを手配する人がいて、素晴らしい包丁があり、そして、レストランを小奇麗に飾って、メニューをつくって、ホームページで発信する人、つまりマネージャーがいれば、三ツ星級の腕と消費者はつながります。いなければ、さっき申し上げたように、三ツ星級のシェフと消費者が二人で座っても何も起きません。似たようなことが日本全体の文化芸術に起こっているのではないかとということです。才能ある人やアーティストはたくさんいます。みんな心の豊かさを求めています。ところがそれが十分につながらない。それが今起こっているのではないか、あるいは戦後もずっと起こってきたのではないかとというのが私の仮説です。

では、それは、そもそも誰がやるべきなのでしょう。さっきのレストランでの役割というのは文化芸術全般では誰が負うのだろうかということです。やるべきと思われる人たちが、これまで何をやってきたかということをお話したいと思います。

まず、「放っておくべきだ」という議論もあるでしょう。「需要と供給はいずれはつながるのだから、変に介入しない方がいい」という議論です。そうではなくて、「やはり国が動かないと駄目でしょう。特に伝統芸能というのは、若い人にとっつき難いので放っておくと滅びてしまう。だから国の出番でしょう」という見方もあります。「これからは地方の時代だ。

だから私たち自治体でしょう」という議論もあると思います。いや、「金があるのはやはり企業だ。だから文化を産業にして、あるいはメセナというCSR、社会貢献ということで利益の一部を振り替える。それがこれからは大事だ」という見方もあるでしょう。「これからは国の財政も経済も厳しいから、NPOや個人、海外の企業が頑張るべきだ」という議論もあるでしょう。あるいは、「本来のレストランに近い美術館や音楽ホールがもっと頑張れば」という議論もあろうかと思えます。こういったプレーヤーが、これまでどういうふう文化を支えようとしてきたか、少し見てみます。

これは、政府の支出に占める文化予算の割合です。上の棒グラフは国家予算に占める文化予算の割合です。明らかに高いのはフランスで、政府出資の約1パーセントを文化に使っています。韓国もそれに近いです。下半分は寄付です。いいデータがないのでGDP全体に占める寄付全体の割合で、文化芸術だけではありませんが、大体の傾向は出ると思えます。これは、予想どおり、アメリカは非常に多いです。アメリカは政府はほとんど何もやっていません。しかし、民間の財団や個人のお金持ちがお金をどんどん文化芸術につぎ込んでいます。いわゆるアングロサクソンという英米は同じ傾向で、政府はあまり芸術や文化に口を出すべきではない、民間に任せるべきだということで寄付が多いですが、イギリスは、90年代の半ば以降、ブレア首相の頃から少し政府が力を入れ始めました。ドイツもどちらかということフランスに近いです。

では、わが日本はどちらのタイプだとお考えでしょうか。残念ながらどちらでもない。政府も少ししか出していない。民間からも少ししか出ていません。これでは、需要と供給はきちんとつながりません。では、自治体はどうか。地方自治体もどんどん財政が厳しくなって文化への出費は右肩下がりになっています。では、企業が利益の一部を配分するメセナ活動はどうか。これも最近横ばいどころか、むしろリーマンショック以降は下り坂です。企業も十分支えきれていません。

では、肝心の個人はどんな状況か。個人の生活の中でレジャーや文化がどれくらいの位置を占めているかというのがこのグラフです。これもOECDのグラフで、かなり信頼のあるものです。個人の生活の中でどれくらいの時間をレジャー、つまり文化芸術活動やスポーツに使っているかという調査ですが、日本は二番目に低いのです。メキシコに次いで低い。たまたま同じページに睡眠時間というのがあったのでとってきました。同じように日本は眠らないのです。韓国が一番眠っていないのですが、一番眠っているのがフランス人です。

日本人は眠る時間も惜しみ、レジャーの時間も削って、では一体何をしているのでしょうか。外で働いているのでしょうか。実はそうではないのです。定義は難しいですが、実労働時間で見るとOECDの平均ぐらいしか働いていません。つまり、そんなに働いているわけでもない、たくさん寝ているわけでもない、レジャーに使っているわけでもない、一体日本人は何をしているのでしょうか。その答えになる統計はないのでお示しできませんが、何となく漫然と過ごしているとか、自分でしっかり今日はレジャーを楽しむという意識なしに、ダラダラとオフィスで漫画を読んだりしているのかもしれない。

ではなぜ、需要と供給を結ぶ努力を怠ってきたのでしょうか。一つは当然、戦後の経済優先で、これはある程度必要だったと思いますが、それが惰性で続いてしまいました。特に、「ジ

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われたことですっかり得意になってしまって、戦後の物質主義、効率主義がダラダラと続いてきてしまった。それが最近のグローバル化にあって、特に短期成果主義、効率主義、業務仕分けというのがありますが、とにかくすぐに成果が出ないことには金は使っては駄目だという流れが出てきてしまいました。しかし、文化というのはお金を費やしてもすぐに結果は出ません。したがって、文化は常に横に追いやられてきたということではないかと思えます。

そういうことの結果、国レベルのアートマネジメントシステム、つまり供給と需要がうまく結びつくようなシステムを、国も社会も財界も十分創ってこなかったのです。バブルの時期はチャンスで、財界人で文化に関心がある方もたくさんいらっしゃいましたが、ルノアールの絵を買って自分の部屋に飾るなど、いろいろ金は使ったけれども、今後の日本の文化芸術の底力につながるような知的文化的インフラにはほとんど投資をしませんでした。単なる金儲けの対象か自分の趣味か、少し失礼な言い方かもしれませんが、そういう方々が多かったのではないかと思えます。そうすると、文化芸術というのは世界的な地位が低いままで、なかなか社会の中心にきません。家庭においても、学校においても、職場においても、文化芸術が大事だということを語る場すらなくなってしまったような気がします。そうすると、本来持っている力が出し切れないのです。

一昨年(2010年)の3・11の後の過剰な自粛ムードがありました。文化芸術なんてとんでもない、東北の方々が苦しんでいるのに何故音楽会をやるのだという議論が高まって、劇場の火が消えたようになりました。気持ちはよく分かります。日本人は優しいですから、人が苦しんでいる時に自分だけ楽しむのはどうかなという気持ちを持つのは当然です。しかし、結果的にはこれが経済を更に冷やし、支援する力を削いだような気がします。しばらくしてから、こういうときこそ、我々自身が、被災を免れた人が文化芸術の力を使って彼らを応援しようというようにやっと変わりました。しかし、半年くらいの時間がかかったような気がします。

戦後、あえて言えば150年前から日本人は欧米の、近代合理主義や化学主義を取り込み、それに大成功したが故に、本来日本人が持っていた文化芸術に対する親しみの気持ち、文化芸術の力を自分の力にするという意識を失い、その役割を軽視してきたのではないかと思えます。

そうは言うけれど、文化芸術にどんな力があるのかということに疑問に思われると思います。いろいろな力があります。今日は時間がないのでさっと飛ばしますが、まず、自分の気持ちを表現する方法として文化芸術がすごい力を発揮します。それとも関連しますが、人が生きていく力、明日への夢といったものを与えてくれるのは、やはり文化芸術です。そして、幸福感を与えてくれるのも文化芸術だと思います。

過去、いろいろな文化人が文化芸術は素晴らしいと言っています。夏目漱石や紀貫之も言っています。私もこれをいろいろ引用しながら、でもこの人たちはみんな文化人なのだから、文化が大事だと言うのは当たり前だと思いました。

本当に客観的にそうなのだろうかと思ったのですが、ここで分子生物学の村上和雄先生という筑波大学の名誉教授がいらっしゃいます。彼によると、人間には遺伝子がたくさんありますが、普段はその内の2パーセントしか使っていないのだそうです。98パーセントは眠

っています。しかし、何かすごいことに感動すると、ポジティブな遺伝子が目覚めるのだそうです。ですから、よく「笑いはがんに効く」と言いますが、本当に笑って楽しいと、それによって治癒力のある遺伝子が活性化されて、実際に病気を治す力が高まるということは既に証明されています。アメリカの糖尿病学会でもそれに注目をして臨床実験をしたところ、本当に笑いや感動を持った患者の血糖値が下がったそうです。なぜそうなるのかを今研究しているそうです。心とは何かというのは、まだ科学は答えを出していません。しかし、心が動くと身体にいい影響を与えるということは臨床実験で証明されたわけです。ですから、文化芸術は素晴らしく、人を元気にするというのは事実だということが客観的に示されたのではないかと思います。

次に、社会的な役割、コミュニケーション能力と書いてありますが、私がヨーロッパにいる時にロンドンのシェークスピアを観に行きました。「リア王」という悲劇を見たのですが、最初に出てきた主役がアフリカ系の、すごい筋肉隆々たる俳優でした。私が持っているリア王のイメージとは全然違うのです。白人で痩せこけて髭を生やした哀れな老人です。「えっ、この人がリア王をやるのか」と若干違和感がありました。しかし、見ているうちにだんだんその人の演技力に引き込まれて、その違和感はあっという間になくなってしまいました。

その後聞いたのですが、ブレア首相はアフリカや中東のような旧植民地からどんどん人を入れなければいけないのです。政治的な責任もあって、過去の植民地の人は自分の国に迎えるという方針をとっていました。しかし、そういった方々は何しろ英語も上手ではない、算数もあまりできない、社会風習も慣習もよく知らないというので、どうしても孤立し、場合によっては犯罪に走らされがちです。どうやってそれを防ぐかというのを考えた末の答えが芸術だったのです。そういった方々は、数学はできなくても演技や歌は上手かもしれません。どんどんそういう人を文化芸術分野で使おうと積極的に登用した結果、成功したということを知りました。

それを聞いて、「あの時見たリア王は、きっとそういう人だな」と思いました。放っておけばもしかしたら犯罪組織に巻き込まれたのかもしれませんが、そうやって才能を見出してもらって、演劇で社会に貢献しています。だから褒められ、家族もハッピーになり、みんなハッピーになったはずです。そして、イギリス自身の芸術のレベルが上がったのです。そのように、社会的に包摂するということでしょうか、そういう力が、実は文化芸術にあるということです。

経済効果があるということは、ご説明するまでもないでしょう。国際的に役立つと言われるのもしかりです。ソフトパワーやナショナル・ブランドといった言葉があるように、今の日本でブランド力というのは、「くまモン」もそうですが、政治経済ではなく文化の力で創られています。

それから、最近私が特に重視しているのは最後の二つです。一つは固定観念からの脱皮です。芸術というのは、常識的なことをやっていたのではあまりうまくいきません。芸術家というのは変わった人が多いと言いますが、やはりそうでなければ、芸術はなかなか成立しません。これまでと違うことをやる。したがって、そういう芸術に親しむことによって、固定観念とか、そういうものから脱することができると思うのです。今の日本が一番必要として

いるのは、常識と言われている固定観念、既成概念を突破することだと思います。そういう力を与えてくれる、きっかけを与えてくれるのが文化芸術ではないかと思います。

そして最後に、日本人がずっと大事にしてきた価値観、先人の知恵、そういったものを文化財がしっかりと持っているということです。もう千年、二千年の間、日本は異民族に征服されずにずっと大事に日本的な発想、思想を蓄積してきました。それを、我々は今十分に味わっているのでしょうか。決してそうではないと思います。

それでは、日本の伝統文化にどんな価値があるかという話に移りたいと思います。いろいろな見方があると思いますが、今日は二つに絞って話をします。一つは、日本人の持っている自然観です。日本人は、「人間は自然の一部だ」と考えます。これに対して欧米の方々は、「人間というのは理性がある、だから自然よりも偉い、自然を克服していい、開発していい、それによって神に選ばれた人間はより良い生活ができる」という、基本的にはそういう発想があると思います。日本人にはそういう発想はありません。自然はもっと深い、賢い、幅が広い、とても人知の及ぶものではないという認識、自然に対する畏敬の念と同時に愛情もあると思います。それから二つ目は、日本人は目に見えないものの価値をしっかりと評価する能力、あるいは習慣があると思います。この二点は後ほど詳しく取り上げます。

日本人には、もちろん長所短所がたくさんあります。長所のうち、例えば勤勉性、緻密さ、新幹線のような時間の厳守などです。これは150年間の近代化、戦後の経済成長に大いに貢献をしてきました。したがって、我々もこれを大いに自慢するし、世界も「日本人は素晴らしい、その理由は勤勉性であり組織力である」ということでした。ところが、自然観あるいは目に見えないものの価値も目に見えるものと同じように重んじるということは、近代化の流れには必ずしもそぐわないということで、脇に置かれてきたのではないかと思います。しかし、幸い日本人の心にはしっかりと残っており、それを表しているのが伝統や文化財ではないかと思います。

少し具体的に話をします。まず、自然観です。この写真は一昨年、世界遺産になった平泉の毛越寺の庭園です。典型的な日本庭園で、いわゆる浄土庭園と言われているものです。一見して分かるように、自然の中にうまく溶け込んでいます。「作庭記」と書いてありますが、これは11世紀にできた庭造りの本です。そこに書いてあることを一言で言うと、「いい庭園を造ろうと思ったら、自然の言うとおりにしなさい」と書いてあります。「ある石をどこに置こうかと迷ったら石に聞きなさい。石が一番よく知っている」ということです。たまたま、比較的最近、城壁の石を積むことで今日本一の石工さんにお会いできるチャンスがあり、この「作庭記」の話をしてみました。「そういうものでしょうか」と聞いたら、彼は、「まさにそのとおりだ」とおっしゃいました。石垣を積んでいき、次に、ここにどの石を積もうかと思って、並んでいる石をパッと見ると、ある石にパッと目が留まるのです。それを置いてみるとピッタリ合う。あたかもその石が「次は私」と言ったように思うと言うのです。もちろん、そんなことは科学的にはあり得ません。しかし、そういうアーティストの勘というのでしょうか、それがその石を見つけたのです。つまり、いかに虚心坦懐に、いかに自然体でいけるかを考えていると、そういうことにも目がいくということだろうと思います。そういうものが日本人の精神だと思います。

それと対照的なのがヨーロッパの庭です。これは、パリの郊外のベルサイユ宮殿の庭です。一見して分かるように一直線、左右対称、そして完全な円を目指した幾何学的な庭で、これはこれで素晴らしい人工美です。しかし、毛越寺の庭園と比べれば明らかで、そこには直線も曲線も左右対称もありません。ベルサイユ宮殿の庭は、まさに幾何学模様のように直線、曲線、左右対称があります。考えてみれば直線であれ、円であれ、これは実は自然界には存在しません。これは直線に見えますが本当は直線ではないのです。直線にしようとして人間が造るものです。二つの点を結ぶ最短距離の線を直線と言いますが、そもそも直線というのは、幅がないわけですから見えるわけがありません。直線も曲線も左右に完全な対称も、人間の頭の中にしか存在しない抽象概念でしかありません。自然界には一つも存在しないのです。だからこそ、こういうものを造れば人間の力、理性の力というものを、これでもかというように見せつけるような、ある意味では人を圧倒するような威力があります。しかし、日本のものはそうではない。自然と一体になっているからこそこれを見るとホッとします。ベルサイユ宮殿の庭は美しいけれども少し緊張感が出ます。人工美をこれでもかと押し付けようとしているような面があると思います。

同じことは茶碗にも言えます。これは、私がいたデンマークのロイヤルコペンハーゲン製のティーカップです。これもひたすら完璧な円を目指しており、そういう意味では美しいです。しかし、楽茶碗はわざと歪めてあります。完全な円は自然にはありません。歪めてあることで自然らしくなります。そして、心が和むのです。

同じようなことは、動物をどう見るかにも関係してきます。日本人にとって動物というのは、人間とほとんど同類です。「夕鶴」という劇があります。命を助けてもらった鶴が人間の姿に変えて与ひょうという獵師のところに来て、毎晩自分の羽ではたを織って恩返しをする話です。私はヨーロッパは長いのですが、こういう話は聞いたことがありません。ヨーロッパでは、もちろん動物と人間が形を変えることはありますが、だいたい悪魔が人間を動物にしてしまう。白鳥の湖がそうですが、お姫様を白鳥にしてしまいます。つまり、動物は、鳥であれ何であれ人間よりもランクが低いのです。だから、そこに落とし込めることが意地悪になるわけです。動物が自分の意思で、自分の感情や愛情、恩を表すために、人間に自分で姿を変えるという話はヨーロッパにはないと思います。そういう発想がないのです。動物というのは人間より下なのですから。

同じことは、実はモノにも言えます。これは、中世の絵巻物で御伽草子に出てくる付喪神という話です。年末に、古道具をみんな庭の片隅に捨てます。捨てられた古道具が、「どうも人間はけしからん、俺たちを使い捨てにしやがって、少しこらしめてやろう」ということで、みんな思い思いに妖怪の姿に形を変えて、夜、行進をします。「百鬼夜行」という話で、これもとても実際にはあり得ないけれども、日本人には何か分かります。使い古した椅子も、「もう座れないけどちょっと捨てるのは惜しいな。かわいそうだな。思い出もあるし、捨てないでと言っているような気がするし、何か魂があるようだ」というのが日本人だと思うのです。どちらが良いか悪いかではなくて、日本人がそうやって、人間以外のものにも親しみを持ち、同一レベルのものと考えてきたのだと思います。

そういった自然観を持っているということは、自然への敬いであり他者への思いやりを持

つということです。相手が動物だろうと何だろうと思いやりがあります。クジラを捕ることは欧米から随分批判されていますが、クジラを捕ると一頭一頭に戒名を与えて祀ってあげるということをやるところもあります。

それから、針供養というのをやります。おそらく、欧米の人は錆びたらもう捨てるでしょう。しかし、日本人は長い間ご苦労さんと言って柔らかい豆腐に刺してあげます。そういう思いやりというのが、日本人はより発達していると思います。そうであれば、当然違う価値観、自分とは違う姿をしているものも受け入れるという多様性の受容にも通じます。これは、当然世界の平和に役立つと思います。

二つ目の、目に見えないものの価値についてです。これは、長谷川等伯の有名な水墨画です。日本人は、書いてあるところ、墨が塗ってあるところではなく、そうでないところも非常に重んじます。白いところは塗り忘れではありません。そこにこそ、筆では表現できないようなことが表現されているということが言えると思います。

音についても同じです。日本人は「間」というのを大変重んじます。音楽でもそうですし、会話の途中でもそうです。欧米の人は、一生懸命話そう、話すことで相手に伝えようとしません。日本人は、それだけではなくてパッと「間」を置きます。そこで、ものすごいコミュニケーションができます。欧米の人は「間」というのに一番緊張感を持ちます。ですから、それを嫌って次に何かしら話そうとしますが、日本人は割と1対1で黙っていても、10秒20秒平気です。そこで、いろいろなコミュニケーションがあります。そのように、目に見えないものも、音に聞こえないものも、しっかりと評価するというのが日本だと思います。

パリにいる日本人の指揮者が、武満徹という日本の作曲家が作ったシンフォニーを演奏した時のことです。このシンフォニーは、最初、何小節か休止符で始まるのです。ですから音は出しません。彼が、パリのオーケストラのリハーサルでそれを振ろうとすると、みんな少しデレツとしているのだそうです。指揮者が「もう音楽は始まっているのだから、ちゃんとしろ」と言っても、彼らは「音は出さないのだからいいじゃないか」という返事です。それで彼は、「これで音楽が始まった。だから君たちは沈黙を弾くのだ。」とフランス語で言ったそうです。「つまり音楽はあるのだ。たまたま音を出してないだけで、もう音楽は始まっているのだ」と、それを何度かやっているうちに、フランス人は割とそういうところは繊細で、日本人の繊細な芸術が分かる人たちですから、やがて良く分かってくれたということです。それが一つの例です。そういう目に見えないもの、音に聞こえないものを評価できるということは、すなわち相手の心の中を尊重する、文化を尊重する、精神性を尊重する、そういうことにつながるのではないかと思います。

そのような日本人の伝統的な思想文化は、これからの世界にとって大変重要だと思います。これからの環境問題、資源エネルギー問題、あるいはテロ、憎悪の連鎖といったものの中で日本的なアプローチをするのは、それで全て解決するわけではありませんが、近代主義の一種の結果を補える心構えとして、これからの世界にとって重要であり、そういうものは、実は日本にしっかりと残っているということです。日本人にとって、もう一度それを再認識し、評価し、自信を持ち、誇りを取り戻し、そして世界にその共有を求めていくことが、我々の役目ではないかと思います。文化芸術にはそういう力があります。嘗々として先祖が伝え

たいと思って表現してきた知恵や思想が、きちんと文化財に残っています。そういう力を、我々はもっと吸収しなければなりません。そういう仕組みを、もっと創らなければならないということが申し上げたいことです。

その関連で、最近の富士山の登録のことを申し上げます。富士山は、文化遺産で登録をされました。自然遺産というのは自然や地形の美しさ、地質学的な学術的な意味がある、あるいは極めて独特な生態系がある、したがって守らなければならないというものです。文化遺産は、人間が創った芸術作品や建物で、素晴らしい歴史的な価値があるものを残していこうというものです。富士山は、山ですから自然遺産かなと誰もが思います。しかし、いろいろな経緯があり、最終的には文化遺産になりました。

そして、タイトルにあるように、富士山が文化遺産であることの説明として、日本人が長く信仰の対象とし、そこから芸術性を引っ張り出してきた芸術の源泉、「source of artistic inspiration」と言われています。富士山には意思はありませんから、このことは即ち富士山から素晴らしいインスピレーションを日本人が得て、それが北斎などの浮世絵になり、万葉集にも詠まれたことが評価されたということです。ということは、日本人自身が、そういう素晴らしい美意識を富士山から学んで育てたということがあったからだと解釈できると思います。

三つの例を比べてみます。一番左は、先ほどもご紹介した平泉の庭園です。これは、日本人が造った庭園です。その庭園に素晴らしい価値があるから世界遺産になりました。小笠原は自然遺産ですから、自然そのものに価値があるということです。日本人がどうしたということではなく、自然そのものに素晴らしい生態系があるから世界遺産になりました。ところが、富士山は人間が造ったものではありません。また、自然として生態系や素晴らしい価値があるわけでもありません。しかし、日本人が北斎の浮世絵のような、素晴らしく世界をビックリさせる芸術を創らせる基になった、日本人にそういうインスピレーションを与えた山です。だから世界遺産になったのです。芸術的インスピレーションを与えたという理由で世界文化遺産になったものは、他に例がありません。それだけ非常にユニークなのが、この富士山の世界文化遺産としての登録なのです。

これは言い換えると、もし日本人が富士山を見て何とも思わなかったら、思っても北斎の浮世絵や万葉集の歌のような素晴らしい芸術を生み出さなかったら、富士山は文化遺産にならなかったということです。自然遺産であれば、富士山だけの力でなれます。人間が造ったものではないのに文化遺産となったのは、日本人に素晴らしい芸術をさせたインスピレーションを与えたからなのです。山には意思はないですから、結局翻ってみれば、日本人が富士山を見ながら、あるいは自然を見ながら素晴らしい美意識、自然観を創り上げてきました。それを芸術的に表現して、その表現された芸術作品が世界に広まったというところを評価されたということだと思います。つまり、日本人が持っている繊細さ、美意識、それを一つ一つ蓄えてきた歴史を褒めてもらったと解釈してもよいのではないかと思います。

それからもう一つ、三保の松原の逆転登録です。富士山全体の地図で見ると、三保の松原は山から遠く離れたところにあります。ですから、もともと諮問機関が「三保の松原は除外しなさい。富士山は登録しても良いが、三保の松原は富士山を見る所であって、山の一部で

はありません。景色は素晴らしいが、山の一部ではないから世界遺産にはすべきではありません」と勧告しました。しかし、最終的には通りました。なぜ通ったかと言うと、日本が、「富士山と三保の松原の間には、物理的に離れていても『目に見えないつながり』があるのだ」ということを主張し、それが幸い通ったのです。広重の有名な東海道五十三次の浮世絵では、富士山と三保の松原がバッチリと描かれています。富士山を描くときは、だいたい白砂青松、つまり松と海岸を描くという人が多いのです。そういう、一種の富士山を評価するパターンになっています。したがって、「日本人の心の中では、富士山と三保の松原は一体なものだ。そこは分かってほしい」ということを説明し、初めは難しいかと思いましたが、これが通りました。

これは、先ほど来申し上げている、日本人の自然観と目に見えないものの価値を認めるという思想と関連しています。これは、まだなかなか欧米人には分かってもらえなかったものが、富士山をきっかけに分かってもらえた、あるいはその第一歩になったということだと思います。したがって我々日本人としては、そういう自然観や目に見えないものの価値を見出すという、日本自身がずっと蓄えてきた思想を改めて再評価し、そして世界遺産になったということを使って、それをもっと主張して良いのではないかと思います。あまり、これを理屈でレクチャーしようとするとう然反発が起こります。70年前の失敗を繰り返してはいけません。ナショナリスティックにはならないように、しかし、我々が信じている価値はこうなのだとすることを、特に世界文化遺産などを使って真摯に広めていくことが必要です。そして、そういう機会を今回与えてもらったと考えるべきではないかと思います。

最後に、都市の話をししましょう。これからは都市の時代とずっと言われています。なぜかと言うと、国はサイズとして中途半端です。地球規模問題を扱うには小さすぎます。アメリカや中国と言えども、自分一人でテロ問題や環境問題を解決できません。他方、国民一人一人の健康や医療、そういう毎日の関心に応えていくには、あまりにも国は大きすぎます。それから、時代の変化に応じて敏速に動けません。シンガポールなど小さい国はまだ良いですが、国はそういう意味で中途半端に規模が大きすぎるし、小さすぎます。

そして、グローバル化が進むとみんな、自分は一体何者なのだろうというアイデンティティを求めるようになります。そうすると、アイデンティティの基は国ではなく、やはり生まれ故郷です。故郷には素晴らしい歴史があり、伝説に根差した固有の文化があります。それが、人々に活力を与えます。そういうことを考えれば、これから文化芸術の力を十分に発揮して、活力を社会に落としていく、そのきっかけになるのはやはり地方だろうということです。

今まで世界でいろいろな取組みがあります。文化庁もそういう都市を表彰することで、地方がその地の魅力を生かしながら活性化していくことを応援しています。成功例もヨーロッパにたくさんあり、それに関する本も随分出ています。英米の学者が、「創造都市」、「クリエイティブシティ」というような言葉で、「これからは地方の時代であり、地方は文化を使って活性化していく時代だ。それが、ヨーロッパや日本のような成熟した経済において、更に付加価値を高める方法だ」ということを理論化しています。そういう本の中で、五つほど成功の条件というのをピックアップしてみました。

一つは、リーダーの持つ先進性です。これは知事であれ、市長であれ、やはりリーダー、トップが未来を先取りしていくことが必要だということです。これからは、ものづくりにこだわっていたのでは駄目です。これからは、文化芸術であり、精神性であり、歴史であるということを理解していただかなければなりません。それから、もちろん市民の協力とサポートが必要です。

今までの例を見ますと、文化芸術で成功している都市では、最初は市長さんが言い出して、まず議会が反対しています。「市長の趣味のために税金を使うなんてとんでもない」という理由です。ところが、やっていくとうまくいきます。時間はかかりますが、市民に理解があれば議会も早くサポートしてくれるでしょう。

それから、芸術的なセンスが必要ですが、知事は芸術的なセンスがあっても、他の仕事がたくさんあります。やはり、任せられる芸術監督みたいな才能ある推進者が必要です。そして、地域には独特の特性があります。それは生かして、差別化をしないとやっていけません。最後は寛容性です。トレランスと英語で言っていますが、これは異なるものや、自分のこれまでの発想とは違う考えを持った人もどんどん受け入れるという心の広さがあるということです。芸術は常識ではなかなかうまくいかないと申し上げたように、これまでの固定観念を打破するような思い切ったことをする人を、ともかく知事や市長のリーダーシップで雇ってみる事です。5年間好きなようにやらせてみるのです。駄目なら駄目で仕方ありませんが、だいたいうまくいっています。あまり行政的な制約をはめなくて、好きなようにやらせるという思い切った先進性が必要だと思います。

では、そういうことをやっていくのに、地域の特性を中心に何をやっていったらよいか、何をアピールするのでしょうか。やはり、その地域には歴史や文化、魅力があります。そこで、世界遺産というのは注目も浴びるし、何より地元の方々がこれから世界遺産になろうと努力することで、そしてなったことで、自分のふるさとにある素晴らしい宝の魅力を感じるのです。

平泉が一回駄目だったことがあります。三年後に再チャレンジして成功しましたが、駄目だった直後に平泉に招かれて講演をしました。その時には、「今後どうしたらよいだろうか」という相談を受けて、「やはり地元の方がもっと平泉の魅力を実感し、それを英語で表現できないと駄目だ」と申し上げました。日本人同士でなあなあで過ぎている社会で、日本史や日本文化を常識だと言っている人だけに話しても駄目で、それを知らない人に訴える言葉を考えないといけません。

例えば、高校生の英語スピーチコンテストをやって、平泉の魅力をどう訴えるかやってみたらと言ったら、本当に真面目にすぐ翌年からそれを始めてくれました。それで、すぐに第1回目の入賞者に会いに行きました。高校3年の女の子でしたが、「どうだった」と聞くと、彼女は「とても勉強になりました。まず、自分は平泉に十何年間ずっと住んでいるのに、こんなに素晴らしいものがあると知りませんでした。知れば知るほど、図書館に通えば通うほど、自分の土地の魅力に引き込まれました。次に、それをどうやって英語で説明するかというのも、大変なチャレンジでした。普通の自分たちが使っている日本語をそのまま英語にしてもなかなか通じません。日本の歴史、藤原が三代あるということに全然知らない外国人に、

どうやって説明するのか随分苦労しました、本当に勉強になりました」と言ってくれて、非常にうれしかったです。それこそ、まさに英語スピーチコンテストをやってみてはと提案した時の私の思いだったのです。

世界遺産になろうとすること、あるいはなったことで一番の効果は何でしょうか。もちろん観光客が来ます。ビジネスも発展します。しかし、地元の方々が自分の土地に魅力を感じ、元気になり、自信や誇りを取り戻し、都会へ行った若い人が戻ってくる、それこそが最も重要な世界遺産効果です。あるいはそれに近い、文化芸術による都市の創造が持つ力だと思います。阿蘇には十分な潜在的な力があると思います。世界遺産だろうと何だろうと、いろいろな方法があると思いますが、ぜひ阿蘇の魅力をフルに生かして、これからの蒲島知事の下で活性化にご努力をいただければと思います。

簡単ではございますが、以上で私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

鼎談

進行係：蒲島知事)

まず、五百旗頭委員、誠にありがとうございました。それから近藤委員には、さまざまな観点から阿蘇の深い問題を理論的に教えていただき、ありがとうございます。

蒲島県政が始まって5年と8カ月ですが、その大目標というのは、県民の幸福量の最大化です。「幸福量」という概念で県政の成績を測るのは、おそらく日本でも初めてではないかと思っています。では、どれくらい熊本県の方々の幸福量は高いのでしょうか。先ほど近藤委員からは、日本はだいたい低いというお話でした。私が知事になったのは平成20年ですが、その前の調査はありません。平成24年度の調査では熊本県民の73.4パーセントの人が幸せで、それが高いかどうか分かりませんが、そのような結果になっています。そして平成25年度の調査では、74.5パーセントです。少しでも上がって、知事としてはうれしいと思っています。では、幸福量はどのように考えたらよいのでしょうか。これはとても難しい問題なのです。功利主義の時代から、なかなか幸福量を測ることは難しいのですが、蒲島県政の中では4つの要因が大事だと考えています。

1つは経済的な豊かさ、2番目はプライド、誇り、3番目は安心、安全、4番目が夢だと考えています。例えば五百旗頭先生を是非熊本に呼びたいと思ったのは、五百旗頭先生が熊本にいらっしゃることによって、二つの大きな意味があるからです。一つは、五百旗頭先生が熊本県立大学の理事長ということによる熊本県人としての誇り、喜びです。そして、五百旗頭先生は全国的な発信力があります。今日も毎日新聞に、ほぼ全面にオピニオンを書いておられました。その経歴にちゃんと熊本県立大学の理事長と書いてあるという誇りです。それから、少年少女たちに対する夢を五百旗頭先生は与えてくれます。そういう意味で、五百旗頭先生自身の存在プラス経済的な価値、あるいは誇り、夢、そういうことを通して、幸福量に大きな影響力を与えているのではないかと感じています。

最近、熊本県では最も大きな影響力を持っているのが「くまモン」です。くまモンは、経済的な貢献度が年間で約300億円です。それに、誇り、夢、安心安全などを含めると、私

は年間1000億円ぐらいの価値があるのではないかと考えています。

そして、今日は阿蘇の世界遺産について議論をしています。阿蘇は、まさにそういうところ。既に世界の阿蘇だと私は感じています。年間1700万人の人が訪れます。それから、先ほど五百旗頭委員からお話がありましたように、ヨーロッパの政治学者を熊本に呼んで日本とヨーロッパの政治学者の討論会を行いました。そのエクスカージョンで阿蘇に来ました。全てのヨーロッパの方々が感銘を受けていました。だから、既に世界の阿蘇なのです。これをどのような形で幸福量につなげていくか。そのポイントは、阿蘇が世界文化遺産になることです。それによって、熊本県民が誇りを持ち、より経済的に豊かさを獲得し、そしてより夢を持つことができます。

私も小さいときに、阿蘇で飼われている牛を見て、将来は阿蘇で牛を飼いたいと思っていました。それが私の夢の一つでした。もう一つの夢が政治家になりたいという夢です。阿蘇で牛を飼いたいという夢が、私をアメリカに連れて行きました。そこで、農業研修生として働きながら、あまりにもつらかったのでドロップアウトしましたが、その後勉強して、今、もう一つの夢である政治家になっています。阿蘇の良さというのは、夢を叶えてくれるところです。そういう意味では、阿蘇が世界文化遺産になること、あるいは世界文化遺産になるプロセスが大事なような気がします。

今日は、近藤委員から極めて重要な示唆をいただきました。それは、リーダーの先進性、あるいはリーダーシップ、それから市民の方々の協力、それを見出す才能ある推進者、そして、寛容性と地域の特性を見つけることです。そのようなことを、近藤委員からお話しいただき、きっと阿蘇は世界文化遺産になると思いました。一つは、もう既に「カテゴリー a」ですが、申請して最初からカテゴリー aになるというのは、なかなか難しいのです。だから、もう少しで暫定リストに入ると思います。そのため、今、近藤委員がおっしゃったように、五つの観点から我々は動いていかなければならないと思います。

司会者としては長くコメントしましたが、これから司会者に徹しながら、ご二人にさまざまな観点から、阿蘇のことについて議論していただきたいと思えます。

まず、「世界の阿蘇」としての価値を、地元の方が意識することが大事だと思いますが、先ほどの近藤委員のお話の中から、それをより深めていただいて、地元の方々がより具体的にどのような活動や意識を持つべきだと考えられるか、お伺いしたいと思います。よろしくをお願いします。

近藤委員)

先ほど、平泉の英語のスピーチのことで申し上げたように、おそらく地元の方々は、みんながみんな、阿蘇の価値を十分に理解しきっていない可能性があると思います。そして、日本のことを全く知らない、日本の歴史も、神話も、阿蘇のことも全然知らない人たちが最後は審査するわけですから、そういう人にどのように説明したら良いかを考えます。一步自分のいるところから出て、外から眺めてみて、自分が阿蘇にいる住民として感じた誇りを、どうやって外の人に伝えるかを考えるのです。その二つのステップを、それぞれ専門家の方々のご指導を受けながら、地元の方一人一人が勉強していきます。そのためには、学校や家庭、

職場、地域などあらゆる場で皆さんが阿蘇の話をして、「阿蘇の魅力はこう言ったらよいのではないかと」、「俺はこういうことを見つけたよ」というような阿蘇の魅力を、日常生活や日常会話の中に入れていきます。それが一つのポイントではないかと思えます。

五百旗頭委員)

三保の松原は、富士山を見る一つの枠組みということが貴重なのです。阿蘇山は素晴らしい自然がありますが、先ほど、阿蘇神社にご案内いただくと、一番大事なところは高岳で、中央火口丘の中の高岳がそこに佇んでいると、いわばご神体としての意味を持つのだと言われて、「ああ、なるほど」と思いました。これは、三保の松原に劣らない、みんなが阿蘇を見る一つの型の設定なのです。

それは素晴らしいことであり、そういうものを活性化することも大事ですが、私はもう一つ、今に生きる新しいセンスの若者たちが、それを使うという良さが欲しいと思うのです。既に前から熊本県立大学の学生たちは、「もやいすと」といって野焼きのボランティア協力をしています。250人ぐらいが今年もこちらにお世話になっています。伝統の中で生きてきた技術を持ってやらないと、下手にやると燃やしすぎてもいけないし、自分たちにも被害が及びます。そういう体験をするというのは素晴らしいことです。

それから、去年の7・12でたくさんの方が、阿蘇の外輪山のところで亡くなったという時に、県立大学生は教職員とともにバスを仕立てて、ボランティアをさせてくださいとやってまいりました。私は、県立大学理事長に着任してから、学内に重要な文書メッセージを出したのは二度だけです。最初が7・12の後、我々の熊本の地で大変な被害が、阿蘇を中心とした白川流域に起こっているということです。私は熊本県立大学生が地域に生きるというスローガンを掲げて郷土を愛しているという点では、ものすごく感銘を受けているのです。

蒲島さんのいた東大も筑波大も、私の京大もそうだと思いますが、見ているのは全国先端水準や世界水準であり、自分の生きている地域など考えたことがないという「観念」のお化けになりやすいのです。

そういう中で県立大学に来たら、本当に郷土の和水町へ行って里山の復興運動をやっていきます。和水町とそこへ企業進出した富士電機と熊本県立大生、三者でやっています。現場へ行って感動しました。本当にこの地域を愛していて、地域を支えようと思っているのです。

そういうことで、「悲惨なことがあったら行くということ、諸君はもちろん気持ちはあると思うが、是非行動に現してもらいたい」というメッセージを全学年に出したのが1回目です。

もう1回はあまり素晴らしい姿ではないのですが、去年、国が復興財源のために増税をした際のこと、皆さんご協力ありがとうございました。のみならず、国家公務員に対して給料の返上ということ、国がしたわけですが、それに準じて、地方公務員もやってくださいというので、蒲島知事の下の人たちも、みんなその被害に遭ったのです。ついでに、独立行政法人化しているが、県立大学もやってほしいという話がきたのです。それはやむを得ないだろうと思っていたのですが、組合から「もし、どうしてもそうだとしたら、理事長の記名入りの文書による要請をもらいたい」と言ってきたのです。

「私は、復興構想会議の議長もやりましたが、悲惨は全国どこでも起きます。しかし、どこで起こっても、それを国民みんなで支えるということが大事です。それがあれば、どこでもやっていけるのです。大変なことは分かりますが、特に若い人にやってもらいたい。

私も広島大学の助手だったときは、1カ月の終わりの1週間は、いつも月給がなくなってしまい、借金して最後の1週間を過ごしていたのです。その時のことを思えば、若い人がさらに給料をカットされるのがつらいということはよく分かります。でも、こういうときはお互いだから、支え合うという心の加勢をお願いしたい」という文書を書いたのが2度目です。

そのボランティアの呼びかけに対して、大変に強い反応をしてくれました。そういう機会にこの阿蘇にやってきたときは、郷土を何とかしようということだったかもしれないし、面白そうだったのかもしれませんが、そういうものを通じて、阿蘇の良さというものを知るに至るのです。

それに型を与えるというので、私がどうかと思うのは、この阿蘇の素晴らしい草原に、例えば、世界的な指揮者を呼んでくるのです。世界的な指揮者などには佐渡裕も入っているでしょうから、佐渡裕でも十分ですが、佐渡裕が欧米の友人を連れてきたりして、この大草原の中でシンフォニーを奏でます。あるいはジャズやロックなどをやって、大草原の中で聴く自分の好きな音楽というのは、また全然違った共同体験になるのです。

この自然というインフラを生かすクリエイティブな新しい営み、試み。先ほどの鞠智城などでは、ある種のシェークスピア劇をやるような場をつくり、音楽会をやるというようなこともしたら良いと思いますが、この阿蘇の大草原というものを、こう切り取って有効に生かすということを考えたらどうかと思います。

蒲島知事)

ありがとうございました。

次のテーマは、世界遺産の範囲内で住む人の生活と、遺産の保護との関係というのはとても難しくバランスが必要だと思います。そういう点について、他国の例はいかがでしょうか。

近藤委員)

世界遺産になった場合、あるいはめざす場合のその価値の保全と、地元の方々の生活、あるいはビジネス、観光客などは、相反するものだというのが普通の考え方です。しかし、例えばフランスのように世界遺産を40いくつも持って、文化や歴史とともに暮らしてきた人たちを見ていると、決してそれは対立でも矛盾でもないのです。

どういうことかと言うと、昔からの自分たちの文化や歴史、芸術に誇りを持ち、それを今後とも維持し、子どもたちや孫たちに伝えていくことは、自分たちの権利だということです。ちょうど、民主主義で自分が政治に関与するのは権利であることと同じように、素晴らしい文化財を保持し、保全するのは権利であり、その権利をどうやって実行していくかという発想にたてば、目の前のビジネスや、ちょっとした生活の不便などほとんど問題ではなくなるわけです。

つまり、「義務」として、ユネスコが要求している保全と妥協するような発想だとかな

か前へ進まないと思います。誇りをしっかり持てば、自ずと、条例やルールがなくても守っていきこうという気になるわけです。守るためには、「では、ここに大きな看板を立てるのをやめよう」ということになり、それは当たり前の話です。それを、「ビジネスのためには看板を立てないと来年、商売が落ちる」という目先の発想だと、なかなかうまくいきません。ですから、まず誇りを持ち、その誇りを維持し、そして、文化財を維持し、保全することが権利だという発想をしっかりと持つことで、自ずと道は開けていきます。

フランスなどはまさにそうなのです。ポルドーであれ、古い町はしっかりと保存されています。住んでいる人はもちろん、パリのそうでないところに比べれば不便かもしれませんが、彼らは決して不便と思いません。それを誇りに思い、こうやって自分たちは、この素晴らしい価値を守っているのだと前向きに捉えています。そういう発想をもっと持っていただくことが必要ではないかと思います。

蒲島知事)

阿蘇と富士山の違うところは、富士山は遠くから眺めて芸術性もあるし、あるいは信仰性もあります。しかし、阿蘇の場合、その中に住んでいるということはすごいことだと思います。世界一に近いカルデラの中に、何万人もの人が住んで生活しています。だから、今のバランスの話はとても難しいと思いますが、何千年にもわたって、この草原を人の手で守ってきたということはすごいことだと思うのです。誇りだと思います。

今、誇りという話が出ましたが、今年、阿蘇地域が世界農業遺産に認定されました。その時に、とても素晴らしい話がありました。その認定に力を尽くした大津さんという農家の主婦の方から、「今、南阿蘇の方を区画整理しようという動きがあります。でも、広く経済的に素晴らしい区画整理をしても、今の美しさが失われるのではないのでしょうか。棚田のままの方が良いのではないのでしょうか。だから、知事さん、なるべく区画整理をしないようにしてください」と陳情を受けたことがあるのです。まさにそのような生活と、自分たちが世界遺産あるいは世界農業遺産の中に住んでいるというプライド、その思いがとても重要だと思います。これは阿蘇全部の方々が、きっと同じような思いではないのでしょうか。何千年も自分たちが守ってきたこの草原をもっと守ろうと、皆さん野焼きに参加します。そして、阿蘇以外の方がボランティアで参加し、先ほど、五百旗頭委員がおっしゃいましたが、県立大学の方でもそういうのをやります。だから、ここに住んでいらっしゃる方の誇りを更に高めるために、ここに住んでいない人たちの動きも大事だと思います。

五百旗頭委員)

同感ですね。蒲島さんがヨーロッパの学者を引率して阿蘇を回ったら、みんな感嘆しました。だけど、普通には見に来ないし、分からないのです。しかし、蒲島さんは阿蘇の魅力を確信し、誇りを持っています。ですから、学会会議を開くと言って連れてきて、観光させたのです。

実は、地元の方が阿蘇の素晴らしさを高く評価しているかは、割と疑わしいという気もします。どうしてかと言うと、私が防衛大校長をしていた時に、前任者の西原先生が、「日本

しか知らないという人は、実は日本のことも知らない。軍人が愛国心にかられて、国を破滅させていくようなことだってするわけです。本当に日本の良さを知るためには、一度外を知り、外の目を持つとき、それを持って見返したときに、実はより良く日本自身を知る」と言うのです。近藤さんも、実はそれを地でいっていらっしゃるという気がします。

中国人や韓国人が、阿蘇のカルデラにどれほど驚き、感動するかということを、皆さん分らないと思うのです。韓国には火山がありません。中国も意外にないのです。

私は、5年間「新日中友好21世紀委員会」の委員を仰せつかりました。両国政府にアドバイスをする委員会なのですが、そこで毎年、日本で1回、中国で1回合宿をして討論します。すぐ歴史のことにもっていくので、「歴史のことをおっしゃるのは分かるけれども、どうして戦後の日本の良さは言わないのか。戦後、日本はこんな良いことをしている。中国のためにもいいことをしている。なぜ、それを言わないのか」というような応酬をしなければいけないので、実に重苦しい場面もありました。その中国の人たちが、浅間山のある軽井沢で会議をしたいと言うのです。どうしてかと言うと、彼らは火山を見たことがないからと言います。ところが、予定していた時に浅間山がたまたま爆発したので、危ないということでできませんでした。それは、たまたま小林陽太郎さんという日本側座長が、軽井沢に迎賓館を持っていたからそういう話になったのですが、もし、阿蘇山でやったら、中国の人も韓国の人もビックリするほど感動するのです。

ここに、そういう国際会議をするインフラを持って、阿蘇の人が「素晴らしいんだよ、来てごらんさい」と言って、来てみたら、彼らはみんな思っていた以上にすごいと感動すると思います。阿蘇の魅力を我々は十分知らないかもしれない。それ以上にあるのだと確信を持って、是非一緒にそうしたいと思います。

蒲島知事)

それでは最後に、世界への効果的な発信の仕方について伺います。既に弁論大会については、近藤委員から示唆をいただきましたが、例えば、長い間外交官として過ごしてこられて、外国の人にどのように効率的に、効果的に発信できるのかを教えていただきたいと思います。

近藤委員)

私には一つの確信があります。日本の良さを最もよく世界に伝えるのは、世界の若いアーティストを県に連れてきて、半年でいいから住ませる「アーティスト・イン・レジデンス」というものです。若いアーティストを日本に連れてきて、やっと生活できるくらいの若干のお小遣いだけあげて、あとは自由に創作活動させるのです。そうすると彼らはみんな、京都でも阿蘇でも、その自然や文化・伝統の素晴らしさを感じて、そこからすごいインスピレーションを得て、日本が大好きになります。その地域が大好きになって帰っていきます。そういう人は、やがて偉大なアーティストになれば、まさに日本を発信する大使として活躍してくれるわけです。そういう例が、過去にいくつかあります。

例えば阿蘇はこの雄大な景色を見るだけで、おそらくものすごいインスピレーションが湧くと思います。ですから、そういう外国人を毎回5人ぐらいでよいので、半年ぐらいずつ住

まわせるレジデンスをつくります。そんなにお金はかかりません。それは毎年10人、20人と増えていきます。日本の他の地域にもありますから、前半は京都に来て、その後阿蘇に行くとか、阿蘇に来てから北海道に行くというように、そういうところと組んでもよいです。効率的に世界の本当に繊細な人たちの心を掴むというやり方が、おそらく一番早いです。日本人は口頭でいろいろと説明するのが下手です。しかし、一番良いのは日本に来てもらう、住んでもらう、特に地方の素晴らしさを感じてもらう。言葉のあやのようですが、それが最高の発信ということだと思います。

五百旗頭委員)

近藤さんのようなプロではないので、的確なことが言えるかどうか分かりませんが、先ほど、九州横軸ということを講演の中でお話ししましたが、もう少し言うならば、アジアの横軸です。この九州横軸はアジアに延ばされなければいけません。アジアの人たちは、もしこの横軸に乗ったら、先ほどの火山、カルデラの壮大な景観に感動するだけではないのです。日本人の優しさや人に優しい生き方に気付き、ステレオタイプで日本人はけしからんと思っていたら、住んでみたらホッとするということになります。近藤さんがおっしゃったとおりです。

反日運動が行われている時に、先ほどの新日中友好21世紀委員会の提案で、高校生をお互いに100名ずつ呼び合おうというのを提案して実施したのです。来る時には中国で愛国教育を受けて、日本というのはけしからん、悪いやつだと思っていたのです。ところが、2週間日本でホームステイなどをして、帰る時にみんな作文を書きました。「全然違った」「日本人はこんなに優しい」「心の細やかな心遣いをしてくださる人だ」「いい人たちだ」「今度は留学生として是非来たい」という感想です。ほとんどそのパターンとなります。

それから、極めて旅行エージェント的に具体的なことを言えば、ゴルフが意外に安くできます。昔は日本のゴルフは高かったけれど、今は、そう混み合わずに安くできます。かつ温泉があります。そして、熊本県について言えば、素晴らしい医療があるのです。ですから、医療ツアーに来ていただくというパッケージを作れば、これは相当に効果を上げます。

そういうことに加えて、先ほど申し上げた大音楽会、世界的な人を呼ぶようなイベントを開催します。蒲島さんは、学者をイベントで連れてくるという作戦でした。もっと広く多くの人をこの地に連れ込むためには、音楽会であれ何であれ、世界の素晴らしい水準のものが、素晴らしいところで行われるというブランド性を持ったイベントを創ることがすごく効くと思います。

蒲島知事)

ありがとうございます。阿蘇が世界農業遺産に認定された時に感じたのですが、日本の代表機関が農水省なので、農水省に直接、間接的にお願いすることになるのですが、それだけでは弱いような気がしました。そこで、最後の段階で熊本県は、小野副知事と先ほど紹介した大津さんとシェフの宮本さんをFAOの本部に送って、プレゼンテーションしてもらったのです。だから、第一段階は国の機関にお願いするというのと併せて、直接的な発信も必要

ではないかと思っています。

それから、先ほど近藤委員から、芸術者をここに半年でも住ませたら良いのではないかと
いう話がありました。阿蘇市の副市長も来ていますから、一步一步阿蘇が世界に発信できる
ように、あるいは阿蘇が世界遺産になるように一緒にやろうではありませんか。阿蘇地域振
興局長が来ていますので、是非予算申請をしてください。

それでは、あと5分ほどありますので、ここで会場からの質問を受けたいと思います。

質問1)

包括的なクエスチョンになると思いますが、まず知事に一言。熊本は、そういういろい
ろなものを含めて、近未来、本当に九州の州都となれるのかどうか、お考えいただければと思
います。

それから、近藤先生、五百旗頭先生ですが、世界遺産の指摘とか、いろいろな間接的な影
響というより、私は60年来、戦後の家庭教育がめちゃくちゃにされたと思います。まずは
基礎固めはそこではないかと思うのです。やはり、目に見えないものとか、いろいろなもの
の大切さを子どもたちに営々と身に付けるためには、私は教育者が要と考えています。そ
れが、もう今の大人も全て、一言で言うと「花より団子」。お分かりになると思います。「ス
ポーツなんかやってどうなるのだ」、「腹が減ってどうなるのだ」と言っていた大人が、60
数年前はたくさんいたのです。教育現場でもそうです。今は、スポーツについてそういうこ
とを言う人はいません。だから、いかにそういう教育が重要かということをおきたい
と思います。以上です。

蒲島知事)

端的に熊本が州都になれるかについて、まず、道州制が実現したら州都になるという生き
がいを持ってやっていかないと駄目なのです。私は、必ずや道州制の実現のもとでは、
福岡はニューヨーク的な役割、熊本はワシントンDC的な役割を果たすべきだと確信してい
ますので、その方向に進めば必ずなります。駄目だと思ったら駄目です。

五百旗頭委員)

教育の問題についてご指摘のことは、大変大事な点だと思います。そういう「花より団子」
で、経済がいかなくてもどうしようもないと進んできたのですが、近藤さんが先ほど示して
くださったように、ある程度物的なものが満たされると、心の豊かさの方が大事だと国民の
多くが重視するようになってきているのです。その中で、ご指摘のように「スポーツなんか」
と言わずに、「スポーツは大事だよ」という認識。それは、身体を鍛えることだけではなく、
健康のためだけではなく、みんなとともにチームワークを持って一つの目的に向かう、その
ことも尊いという認識が大事かと思っています。

近藤さんが、西洋に対して日本人は精神性や優しさというものがあると言ってくださいま
した。大変うれしいのですが、戦前、例えば岡倉天心というアジアの一体性を重視した人が、
そういうことを強調したのです。その岡倉天心のものを読むと、今だったらホロッとするよ

うな魅力があるのです。いろいろ芸術や宗教に関わる人というのは、そういうことをおっしゃいます。ところが、現実には日本が富国強兵の中で何とか豊かになりたい、そして強くなりたい、負けない、ばかにされない、畏怖を広げたいと驕進してしまっていて、岡倉天心が言ったような西洋とは違う東洋の精神性などというものは、少しもそうではないみたいになってしまいます。

ところが、戦後は、一度失敗をしたけれども、人に優しい生き方をしています。日本は、今日の統計には出てこなかったのですが、世界の中でBBCがやっている「文明に貢献している国と邪魔をしている国」という世界世論調査では、日本は、今年少し下がりましたが、5年間ほとんどトップなのです。中国と韓国でだけは、日本の評価は低いのです。それ以外の世界では、ものすごく評価が高いのです。それにはいろいろな理由がありますが、やはり戦後、人に優しい生き方をしたのです。

経済が発展したら軍事力を強化して周りを圧倒するというのは、中国のやり方です。戦後の日本はそうしなかったのです。福田ドクトリンというものの中で、「経済大国になっても軍事大国にはならない。むしろ、アジアの人たちと心と心の触れ合う友情を築きたい」と、ささやかですがODAでお国の発展を支えるということをしました。その、人に優しい生き方というのが非常に好感度を上げ、日本人の食べ物やファッション、アニメ、映画という文化的な素晴らしさに加えて、日本が温かく接してきたことが高い評価を受けているわけです。そういう意味で、戦前は精神性を持った日本と言っても、現実の話もそうではありませんでしたが、戦後、日本はそれがやっていることに裏付けられているので、大いに希望はあると思います。ただ、国防の安全というのを失ってしまったら、また逆の破綻をきたしますので、そこはそこでしっかりやりながら、日本の良さを残していくのだと思います。

質問2)

今日は、三人の先生方、どうもありがとうございました。私は、蒲島知事の後輩ですが、研修生としてアメリカに行くことによって、先ほど五百旗頭先生が言われたように、日本の本当の良さが分かります。アメリカやいろいろなところを回ってきて、阿蘇ほどきれいで、本当に良いところはないというのを確信しています。ですから、先ほどの知事の話ではないですが、世界遺産をめざすために、この阿蘇に住んでいる人が、この阿蘇の魅力に自信を持ってみんなに伝えていけば、必ず阿蘇は世界遺産になると信じて行動することが一番だと思っています。本当に今日はありがとうございました。

蒲島知事)

どうもありがとうございました。

長時間にわたってご意見を賜り、誠にありがとうございました。このミーティングは県政にとって、そして、私自身にとっても大変有意義な時間です。今後は、今日いただいたご意見を踏まえながら、住民の方々や行政が一体となって、この地域が世界に飛躍するための取り組みにつなげるような形で、県政を運営していきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。